

李豊楸教授の学術総括講演全文

* 2019年6月23日の夕方、第一回「洞天福地研究と保護国際学術検討会」はすべての学術討論のプログラムを終了した。正式に閉幕する前に、李豊楸教授が検討会における学術活動を総括する講演を行った。ここで全文を掲出し読者に提供する。

みなさんこの数日は忙しく、たいへんお疲れ様でした。第一回「洞天福地研究と保護」国際会議を、地相が素晴らしい寧徳の蕉城で開催することができたのは非常にありがたいことです。あらゆる会議で最も難しいのは始めたばかりの一回めです。万事ははじめが難しいのですから！ 各種の議題をひとつに集めようというのは、実に容易ではありません。このたび清華大学国家遺産中心は、たいへんな労力をかけてすばらしい計画を立て、各方面の専門家を招待して一堂に集めてくれました。ここで関連する問題を検討してみたいと思います。



李豊楸教授

対話と蓄積

今回の会議をセッティングする中で、実際にテーマに沿っていくつかの計画が立てられました。当地には霍山の調査報告が二編あり、「現場」の実際の状況に対する理解もありました。そのため、これを機に調査研究のモデルを打ち立てるべきだと思いました。会議ではどんなテーマが選ばれていたでしょうか？ もちろん名山洞府には必ずふれるべきです。それらの名山洞府は現地の

専門家によって先行して調査が行われています。将来的にもこのようなスタイルは続いていくと思われます。そこで少し提案をしたのですが、まずは各地のリーダーが最適な人材を見つけ出すを願っています。そのほか、もう一つのスタイルも良いのではないかと考えています。それは、外地の専門家を招いて、いち早く参入してもらい、その後に相互に対話をするというものです。

現地の研究者には有利な点があります。現地の資料を比較的良好に知っていて、なおかつ十分な時間もあり、調査という面では相対的に見て有利です。しかし、時には外地から来た者にも利点があります。というのも、外地の人がもたらす経験は、現地の人に不足しているかもしれないからです。将来にわたってこのようなモデルを用いることができるのであれば、一種の対話のためのシステムを確立することができると思います。つまり、当地の専門家と外地の専門家の共同研究です。当然ながら、清華大学国家遺産中心には、さらにご苦勞をおかけすることになります。志願する研究者や学生を探し出し、現地に来てもらって調査を行わないといけないからです。短い時間ではこのような調査はできず、しっかり計画を立てることによって、はじめて現地に行って調査をすることが可能となるでしょう。

もしこの第一回の基礎の上に、さらにシステムを起ち上げることができれば、現地の人と外地の人が共同作業をする機会ができるのです。このような調査では、いずれにせよ現地にあらゆる成果が還元されます。今回、現地の専門家である林志志先生と謝丁寧先生のお二人のお仕事により、当地における経験をシェアし、多くの便宜を提供していただきました。しかし、さらに提案したいのは、いかに外地の経験を持ち込んで、将来にわたって徐々に積み重ねていくかということです。みなさん考えてみて下さい。日本の「洞天福地研究会」と同じく、この会議が八回・九回に至ったあと、長期的に蓄積された経験というのはかなりのものになるでしょう。これが一つ目の提案です。

歴史的研究の深化

今回、計画されたプログラムの中で、特に心がけられていた点を見て、あらためてざっと整理したいと思います。第一に洞天福地の「起源」についてです。古代にさかのぼり、『山海経』や漢代の資料などから探求されました。このような探求はもちろん有効です。いわゆる洞天福地—十大洞天、三十六小洞天、七十二福地—の組み合わせは、聖なる数である 36 と 72 に符合します。このような神秘的な数字を構成していく過程で、我々は起源にさかのぼることができるのです。これらはいったい何に由来しているのでしょうか？ ひとつは『山海経』や漢代の考古学的資料から、みな詳しく説明されており、助けになると確信しています。考古学の仕事というのは絶えまなく発掘をし、絶え間なく新

発見があります。このような仕事はある程度継続的に行われるものであり、はじめの段階としては、必ずこのような過程があるはずです。

次に、歴史的な研究についてです。今回は唐代、宋代さらに明代の研究がありました。すべての洞天福地が形成されていく際には、(原始的な)モデルから今日認識されている定型的なものに移り変わっていくわけですが、実際に我々がいま見ているのは『道蔵』中の資料です。司馬承禎から杜光庭、『洞淵集』に至るまで、みな長い時間をかけて変遷して、徐々に形成されたものであり、研究すべき細かい問題がたくさんあります。

今回、十大洞天がどのように形成されたのかも議論されました。例えば、茅山の状況も議論されましたが、いずれもかなり詳細な研究でした。これらの詳細な研究こそが何代にも渡って蓄積されていく経験なのです。率直な話から始めますと、茅山の研究に取り組んでいた時期、すでに存在していた国外の経験が基礎になっています。例えば、ミシェール・ストリックマンらが行った茅山の基礎的な研究がありましたが¹、我々が真にこの課題に取り組もうとした時、解釈が難しい箇所がたくさんあることに気づかされたのです。そのため、日本では『真誥』の読書会が組織され、すばらしい注釈として結実しました²。このような状況において、さらに詳細な研究が展開できるのです。このような詳細な研究というのは、次の世代にはより完全でより緻密なものになっていくでしょう。

今回、これまで疎かにされていた問題が明らかにされましたが、基本的にまだ始まりの段階、つまり魏晋南北朝から唐代の段階についてでした。思いますに、洞天福地についての論述をするために、ひいては研究と保護において一定の作用を求めるのであれば、そのカギとなるのは唐宋以後だと思います。唐宋変革期のあと、社会・経済・政治のあらゆる面において大きな変化が起きましたが、このような変化は歴史の中でどのように記録されてきたのでしょうか？文章による記録でもよし、画家による記録でもよし、紀行文も旅行を記録した絵画も存在します。我々は何を利用することができるのでしょうか？歴代遺されてきたいわゆる「名画」について、各種のさまざまな研究資料を用いて、宋・元・明以降の名画を過去にさかのぼって結びつけて考えていく。そのように整理していったならば、洞天福地の変遷と展開をいっそう明確にすることができるでしょう。

現地研究の展開

歴史のことを除けば、現代の洞天福地の研究というのは最も興味があるところだと思います。この二日間、いくつかフィールドワークについての発表がありました。洞天福地の観念を歴史的に再構成するだけでなく、21世紀になって洞天福地

注 1…Michel Strickmann, *The Mao Shan Revelations: Taoism and the Aristocracy*, T'oung Pao II, Vol. 63, Livr. 1, 1977

注 2…吉川忠夫、麥谷邦夫編『真誥研究：訳注篇』（京都大学人文科学研究所、2000年）。のちに、中国語版も出版されている。『真誥校注』（中国社会科学出版社、2006年）。

がはたしてどのような変化を生じるのか、ということも理解したいのです。このような点についてはフィールドワークによらねばなりません。以下、学者としてはいつでもたくさん夢想をしていますので、いくつかの希望を述べたいと思います。

第一に研究方法についてですが、台北の中央研究院では、特に私の妻（中央研究院文哲研究所の劉苑如教授）は、かつて GIS（Geographic Information System）を用いて良好な人文学の研究をしたことがあります。その中には『西征記』の研究なども含まれます³。これは GPS よりも一歩進んだもので、「時間的なレイヤー」です。実際には、この技術はいまやそれほど難しいものではありません。各種の地図にレイヤーをかけて、はっきりと変化を観察することができます。もし我々が洞天福地の場所を決めることができれば、このレイヤーの方法を使って、洞天福地のあらゆるネットワークをより明確に示すことができるでしょう。伝統的な地図ではやはり不十分です。すでにすばらしい専門家もいます。例えば、譚其驤先生は歴代の歴史地理についての整理を行っています。もし GIS を使いこなせれば、空間のレイヤー上に変化・変動をよりいっそう明らかに示すことができるでしょう。

私の息子は地理や地質を勉強しておりましたが、彼らの使っているものは、今すぐに援用することができます。つまり、総合的な地理の情報です。それには地形・地勢・交通施設・人の動きなどが含まれ、新しいベースを作る時の判断材料としています。彼らは衛星で地形を撮影し、立体的に表示することもできます。普通の写真だけではなく、洞天福地も様々な角度から撮影することができるのです。この技術を中国で使うのには問題がないはずですが、導入したとしてもかなりの費用がかかります。さらに地理情報・GIS・GPS の専門家には多様な方法を用いて、洞窟だけでなく、地形・地勢もふくめた、現地環境を提示することを期待します。このテクノロジーは洞天福地への新しい理解をするために有益でしょう。

これらの経験を取り入れる価値はあると思います。今回、まだこれらの技術を応用した研究はありませんでした。もし洞天福地をユネスコの文化遺産に申請するのであれば、この方面は必須でしょう。綺麗な写真だけでは十分ではありません。科学的方法を用いて、3D で提示する必要があるのです。この技術は即刻使われるべきで、そうでなければ非常に遺憾です。いまのところ私自身も利用できておりませんし、（例えば）張公洞をよりよく研究をする術もありません。しかし、（洞窟が）いったいどのようになっているのか、この方法で示すことができるでしょう。この方面ではまだ実現していないことです。洞天福地は単に地勢の記述をするだけでなく、地質の分析もふくめて、地上と地下にあるものを両方明確にすべきでしょう。

第二に、将来さらに発展が見込めそうなのがマイクロシネマで、たいして費

注 3…中央研究院の「東亜文学与文化地図」のサイトを参照。

<http://sds.com.tw/web/sinica/eastern-asia/index.html>

用もかかりません。今回上映されたドキュメンタリーの『霍童』も、出来栄えは良かったのですが、比較的多くの投資が必要なようです。マイクロシネマの方式で撮影すれば、研究者が自分で撮影・編集することができますし、いまのコンピューター技術ならば大して難しくありません。映像による表現によって、はじめて現在の茅山や張公洞の様子を理解することができるのです。いまの若い世代の学者や学生の多くはマイクロシネマで楽しんでいます。研究者自身が監督となるか、誰かと協力するかすれば、マイクロシネマの方式で映像を提示できるのではないかと思います。

以上の二つの方法は過去には難しいものでしたが、現在の技術では基本的に何も難しくはありません。もし洞天福地の実態をよりよく提示しようとするなら、この二つの技術を無視するわけにはいかないのです。

学際的な研究の提唱

続いては「学際的」という点です。このたび陶金君が学者を招聘する際に、学際的ということを考慮しました。彼自身も建築家です。今回は道教の専門家もいましたが、学際的というためには、総合的で、かつ領域を超えるものであるべきです。この点についてはまだまだ考える余地があります。例えば、歴史地理学の専門家がいたら、ある地方の発展と変化から考えることができますが、歴史地理学者がいなければ上手くいきません。鍾乳洞の地形については、基本的に地質学と関連します。研究をする際に地理学や地質学の専門家の研究成果をいくらか利用するかもしれませんが、直接彼らの話を聞くべきでしょう。例えば、茅山の地形と鍾乳洞・カルスト地形といったことは、完全に科学的なものであり、地理学・地質学もしくは歴史地理学の問題です。洞天福地の地勢がどのように形成されたのか、どのような原因でこのような地理・景観が形成されたのか、将来的に地理学の専門家に説明してもらいたいものです。このような学科の統合というのは、永遠にやりつくせない事かもしれません。

陶金君！ 継続して専門家を招いて、このような討論を活発化して、深く掘り下げて下さい。今回は第一回目なので、将来的にまだ機会があるでしょう。目下、歴史の方面では研究が比較的多いわけですが、将来的に異なる学科同士で知恵をしぼっていけば、必ずやもっと良くなっていくでしょう。この点ではまだやるべき事が多いと思います。

現在、私自身も文学と歴史を研究しているわけですが、時にはいささか困難を覚えるものの、図像学の成果と結び付けたいと思っています。このような多彩な学科を総合していくやり方によってこそ、洞天福地の研究を、既存の道教研究を基礎として、さらなる高みに持っていけるのです。このような研究は洞天を世界遺産に申請する際にも必ずや助けになるでしょう。第一回を開催した

ので、このような経験を第二回・第三回に引き継ぎ、ずっと続けていけるでしょう。このような経験はとても貴重なものであり、それぞれの分野の専門家を尊重してこそ初めて実現することです。それはすなわち、洞天福地の総合的な研究であり、考古・文献とテキストが必須で、テキストには歴史・文学とフィールドワークが含まれます。

ひと昔前の王国維が提唱したような一重証拠や二重証拠ではもう不十分で、三重証拠・四重証拠が必要です。言い換えますと、多様な学科を総合するときには、各人がそれぞれ一部分を分担するわけです。歴史研究者もいれば現代の調査をしている人もいる、経典の整理をする人、地理の研究をする人もいます。このような基礎があった上で、最終的に拡張して出てくるものには、見るべきものがあるでしょう。今回、ために比較的抽象的な「儀礼のシンボル」を提示してみました。すなわち、宇宙的なモデルのことです。今はまだ第一段階ですが、将来この基礎をもとにして、最終的には洞天福地の宇宙的なモデルを打ち立てたいのです。仙道の宇宙観にもかかわってくる問題です。はじめに呂舟先生が何度もふれていたように、世界遺産になるためには、民族の宇宙観を表さないとはいけません。これはそれぞれの民族の宇宙観にも関連することであり、異なる思考形態、配慮の方法、人と自然の関係です。このような経験—国外では多くの「聖地」研究があると思いますが—このような研究はすでに久しく行われています。洞天福地は世界遺産への申請をはじめたばかりです。今回は象徴的な体系を打ち立てることを試みましたが、ただの始まりにすぎず、目下上手くやることは容易ではありません。しかし考えてもみて下さい！ もし十回も蓄積していけば、洞天福地（研究）の経験はさらに豊富になり、そこで打ち立てられるモデルは、必ずや始めたばかりの頃のようににはならないでしょう。

比較研究の提唱

洞天福地というものは、道教だけのものではありません。民族のものでもあり、さらには東アジアのものです。今回ありがたかったのは、東アジア世界を研究する研究者を招聘して参加してもらったことです。東アジアという視点を通して、日本・韓国・ベトナムなどを見る、この方面ではできることはもっと多いと感じています。もちろん現在は道教を研究している学者が比較的多いわけですが、洞天福地という問題については、道教研究においても将来的にさらに深めていくべきでしょう。洞天の「仙宮」の制度は、そもそも中華文明の奥底にあり、日本・韓国・ベトナムなどと相互に文化的な交流をしています。このような国際化した観点は、もちろん東アジアから始めて、世界のそのほかの民族と比較研究していくべきでしょう。

いま必要なのは、ゲスターkamp（Lennert Gesterkamp）先生のような研

究で、将来的に比較研究を行っていけるでしょう。我々とは異なる西洋のバックグラウンドをもち、その上で中国研究をしたのであれば、比較をしてもよいとすべきでしょう。何が漢人の社会か、何が道教の宇宙観なのか、比較をはじめて言えることでしょう。そのことが背後にある社会・文化を観察し、何が道教の「仙宮」なのかを理解することにつながります。私は長い間、宗教所において教育をしていたのですが、「比較宗教学」は常に重要な項目でした。洞天福地の研究にも、ひとつの民族の経験から拡張して、さらに大きな視野の中、東アジアの研究の中に置いて、最後に比較研究の視野に落とし込むことを期待します。洞天福地は東アジア世界を体現するもの、中国人を体現するものだと、人々を説得することができるでしょう。このような比較は永遠に不可欠なものなのです。将来、徐々にこのような比較のシステムを導入すべきでしょう。

実際にはこれはなかなか骨の折れる仕事で、宗教学において最も開講するのが難しい科目は「比較宗教」なのです。もし比較をしなかったとしたら、我々が食べる料理と同じことになります。どの系統の料理がおいしいのか考える際、十分な品数の料理があって、口に運んでみて、はじめて「品」（レベル、等級）のことがいえるのです。種類・風味・品質がわからなければ、品定めをすることはできません。比較した後でこそ特色を見出すことができるわけです。将来、「聖地」の比較は必ずやる必要があります。まずはすでに行われたことがあるテーマから始めてみるのを考えてもいいかもしれません。世界遺産の専門家の中には、対話をできる方もいるでしょう。異なった文化のバックグラウンドを持った人たちと、文化景観や地理景観の比較を行うことで、洞天福地が数ある聖地の中でどのような価値をもっているのか提示できるでしょう。このような熟慮を経てこそ、宇宙観のモデルが立ち現れることでしょう。

言い換えれば、シンボルの体系というのは、絶対に一本や二本の論文で理解できるものではありません。比較を通してのみ提示することができるものです。それはつまり民族の風格や民族の気風といったものです。民族の気風というのは、比較してはじめて形成されますので、こちらの方面は必ずやらねばなりません。さらに、このような経験はかなり重要で、私が強調したいのは「現代的意義」です。洞天福地の研究をする際に、歴史マニアや歴史文献マニアの領域にとどまるならば、一部の人間の遊びにすぎなくなってしまうのではないのでしょうか？ こうした研究の経験を「現代」の時間と空間の中に置いてみる必要があります。AIや環境学と対話するだけでなく、「現代」の価値観の中におくことで、このような経験と対話できるのです。現代文明を創造するという点については、洞天福地が我々にいったい何を啓示してくれるのか、ということがその原動力と目的になるでしょう。

現代における啓示と意義を考察する

宗教学は特に啓示を重視します。この啓示というものは個人だけのものではなく、集団的なものでもあります。それならば洞天福地（の研究）はどのようにしてより高い理想に到達できるのでしょうか。この点はいずれ取りまねばなりません！ 例えば、さきほど（会議で）取り上げられたのは「遊道」です。「遊道」は旅行文化に関するもので、旅行文化は表面的には単なる商業行為・消費行為ですが、実際には「遊道」にまで高められたのです。世界各地に旅行文化がありますが、数世紀前から現在の21世紀の間に、現代人の生活の一部へと変化し、日常生活の一部でもなりました。しかしこのような文化はどのようにして再び高みに登ることができるのでしょうか？ どのように研究の要領を把握すればよいのでしょうか？ そこからどのような理想に到達するのでしょうか？ 各自がほかの領域と理想を共有することができます。我々の研究の最終的な目標は「体道」（道の本質の体得）をすることです。つまり「遊道」の精神的な価値を体得することで、旅行者の文化と人類の文化の質を高めることができるはずですが、我々は研究を通して理想を提示しますが、これが道教の「遊道」、そして現代の新しい「遊道」なのです。もし道教の経験の研究を経て総括すれば、新しい「遊道」を打ち立てるのにも力になります。このような要求に到達することができれば、「保護」という二文字にも現代的な意義があることでしょう。

そこで別の問題を提示したいと思います。洞天福地は「現代」においてどのような価値を持っているのでしょうか。この「現代性」というのはどこにあるのでしょうか。この点については、今後の第二回・第三回の会議でもずっと考えなければならない厳粛な問題です。博物館のガラスケースに入っている文物のように、見たら一種の感化を受けるようなものというだけでなく、我々の「現代」の生活にどのような啓示と啓発があるのか、その文化から感じられることは何か、この点は今後の研究の方向にすべきでしょう。理論や理想を語るのは比較的簡単ですが、最も重要なのはどのようにじっくり腰を落ち着けて研究するか、どのように外に出て調査をするのかということです。

じっと座って！ 落ち着くことが必要で、それでこそよりよく思索することができます。一歩踏み出して！ 実地で現在の洞天福地を見ることができるようです。一介の学者として、そして今ここに座っている学者の皆さんも、みなそれぞれの訓練を経て、多くの問題を考えることができます。今回のように知恵を絞れば、実際に発奮することも多かったでしょう。もし発奮したのであれば、その心境を研究と保護において表してみてください。

今回の会議で定められた題目についていえば「研究」の目的は「保護」をするためでもあります。学者のデスクワークを満足させるためだけの研究では、

まだ不十分なのです。目的は保護について新しい方向性をあたえることです。環境の保護というだけでなく、その意義を説いて宣伝する際にもそのようにすることができれば、第一回の会議で築いた基礎はとても価値があることでしょう。なぜでしょうか？ それは神聖な地理と神秘体験という、洞天福地の方向性をすでに切り開いたからです。現代社会は常に神聖化・神話化の方向に向かっていてと考えられ、神聖な感覚・神秘の感覚をとりもどすことも必要としているのです。もし神聖な心境で洞天福地に接したとして、鍾乳石からなるカルスト地形をいかに妥当に表現できるのでしょうか？ 照明で絢爛豪華にライトアップするのでしょうか？ それとも落ち着いた気持ちで、太廟の中に入るのと同じように厳粛で神聖なものを感じるような、山林の中での静寂な音のようなものを体得するのか、どちらでしょうか？ このことは、観光や管理に対する正しい姿勢をいかに打ち立てるか、ということにも影響します。このような姿勢は、いま列席している皆さんが提供してくださった貴重な経験からくるものです。その経験を提供してくれたからこそ、観光と旅行の担当部門の方々にそれを受け渡すことができるのです。

第一小洞天で行われた、第一回の会議に参加できたことを非常に嬉しく思います。この会議は良好なスタートアップにすぎません。もし理想に到達したいのであれば、絶対にたゆまず前進し、深化し、理想化し続けなくてははいけません。今回の会議ではそれぞれのセクションごとに、ある種の雰囲気を感じ、刺激を受けることができました。これは皆さんと共有する価値があることだと思います。簡単な報告ではありましたが、もし不足している点があれば、どうぞ皆さん補って下さい！

（酒井規史訳）

【記者付記】この講演録は、徐知蘭氏・陶金氏・曲爽氏が文章化し、李豊楙教授が内容を確認したものである。この場を借りて、掲載を許可していただいたことにお礼申し上げたい。

【李豊楙教授のプロフィール】

台湾雲林出身。台湾政治大学講座教授、中央研究院中国文史哲所研究院。道教文学・道教文化と華人の信仰習俗の研究に尽力、国家科学会の優秀賞を一回、傑出研究賞を二回（1994年、1997年）受賞。主要な研究分野は(1)中国宗教における神聖地理の研究、『山海経』『十洲記』など。(2)罪と救済を中心とする文学研究、『西遊記』など。(3)道教儀式のフィールドワーク。(4)華人の宗教風俗と社会のフィールドワーク。(5)「常」と「非常」を核心とする中国文化の思惟構造。